第十九回

声を合わせ、息を合わせる（二）

前回の通信で、昨秋、日曜日の綱引き大会に違和感を覚えたことを書きました。声が出てない。力を入れっぱなしで引き続ける。そのことをすぐ年長組担任に伝え、綱引きやってみない?と声をかけておきました。すると今年度さっそく、運動会に綱引きを導入してくれました。

とにかく何も言わずに子どもたちにやってもらって、そのうち誰かが声を合わせだすだろうか。無言チームと声を合わせるチームとがあったら、声出しチームのほうが息が合うので力も強くなるのではないだろうか。そんな仮説を検証するような気持ちで、綱引きに注目していました。

そんな狙いを、私も子どもたちに説明などしませんでしたし、狙いを理解している担任も慎重に事を運んでくれました。言葉で説明しない代わりに、子どもとの会話を重ねながら、子どもの言葉を拾いながら、さまざまなヒントを与えるというやり方でした。

運動会まで毎日のように勝負が繰り広げられ、回を重ねていくうちに、おもしろいことが起こりました。

鼓笛隊の楽器ごとの固定チームでしていましたが、あるチームが実に弱かったのです。連戦連敗、勝ったことが一度もない、そんなチームが出現してしまったのです。体格的に小さいわけでも弱々しいわけでもない。それなのに、なんでそんなに弱いのか。しかもまたエラく派手な負け方をする。数人の子どもは肘をつく腹をつく背中をつくという姿勢に追い込まれ、ずるずると引きずられていくという始末。

ところが全敗チームが、あることに気づいたのです。それは、声を出すということでした。声がどんどん出てきました。そうして声が合ってきました。すると、みるみる強くなって、勢いもついて、一気に無敗のチームへと急変貌を遂げたのです。仮説はばっちり検証され、全く狙いどおり。あまりにきれいにハマりすぎて気持ちが悪いほどでした（ただし、運動会まで全勝を続けたわけではありませんが。）

力を合わせるというのは、とくにめずらしいことではないようですが、よく考えるとそれは大変なことが含まれているのに気づきます。

運動会では鼓笛隊、リレー、綱引きと、年長児は手を変え品を変え同じ一つの事の獲得が求められていたわけです。どれも、個々の能力を高めなければなりません。一人一人の自発性のもと、つらさを伴いながら練習を重ね向上していくことが体験されます。しかし、個人の能力がいくら高いからといって到達できるとは限らない能力があります。それは、合わせる力です。

個々の能力の限界を超えたところ、それが「合う」という世界です。「合う」ことの喜びを経験して卒園していってほしいと願います。

個人がしっかりと個人であること。これを保証し育てるという任務を、私どもはまだまだ切実に負わねばなりません。そうした個人が、自発性を損なわず、その尖端（せんたん）で他者と結び合っていく。これを「協同的学び」というのです。よく誤解されるように、集団的な一斉活動をする事ではありません。自己が十分に発揮されず、人に（人と、ではなく）合わせるというのでもないのです。

息を合わせ、声を合わせる。「遊びの学校びさいようちえん」にはうってつけの遊びとして、今年、綱引きは再発見されたのでした。

声を合わせ息を合わせる修練。

日々のひとコマ

ちゅうりっぷ２組の２学期

おままごとのごちそう！　とっても
おいしそう　たのしそう

忍者になってどこ行くのかな

この頃の流行りは、朝の落ち葉かき

キマッてるねえ
何になりきってるんだろう

ゆかいなとこやさん

なわとびにも挑戦